
諦めるなんて、できない

冬乃星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

諦めるなんて、できない

【Nコード】

N6249G

【作者名】

冬乃星

【あらすじ】

血のつながらない家族。神音と羽音。そのふたりの、なんでもない会話。一話完結、世界観説明なしのめちゃくちゃな話。

何事にも諦めが肝心なんだと、ぼくは学んだ。
運命は何の前置きもなく訪れるのだと、分かった。

「ほら神音^{カノン}、タオル」

「んー？ あー…、そつか。ありがと、羽音^{ハノン}」

渡したタオルでガシガシと勢いよく髪を拭き始める神音に、半ばため息をつきたくなるのを我慢して、持っていたもう一枚のタオルで彼の服を拭いてやる。

吸水力の高いためか、気前よく水分を吸って重くなっていく。

白い白い柔らかなタオルは、その繊細な色を濁った赤と泥に汚染させていく。

部屋につけられたテレビだけが、無感情に音声を流し続けていた。

「お腹すいた、なあ」

「…言うことがそれ？」

「うん。え、だってすつげえお腹すいてんだぜ？」

新しい服に着替えながら、神音はきよんとする。

ことの大きさを理解していないように。

何も考えていないみたいに、笑いながら。

「なら、なんか作るよ。何食べたい？」

「そーだなー…」

その場にべたりと倒れこみながら、神音は宙を睨む。真面目に考えるときはご飯が関係するときだけ、そんな気まぐれすぎる兄貴を見ながら、ぼくは洗濯機に向かう。

もう全部一緒に洗ってもいいかな。どうせ神音のだし。ダメになったら、その時はその時だ。よし、入れちゃえ。

「はーのーんー」

「はいはい、何さ」

「羽音が足りないー」

訳わかんねえ。

相変わらず兄貴は変な表現しかない。空腹はどこへ行っただ。後ろからよっかかって来られても重いだけなんだけどな。

まあ大丈夫か。

後ろに背後霊よろしく兄貴をぶら下げて（といってもぼくの方が身長低いけど）、ぼくはキッチンへ向かった。

その途中で、点けっぱなしのテレビから、飛び込んだ音。

『本日午後5時頃、奏商店街で三人の遺体が発見されました。いずれも喉を深く切られており、警察は殺人の疑いで捜査を……』

「あにきー」

「どーしたー？」

「ニュース流れてる」

「そりゃ、俺の華麗なテクニクに見惚れてだな」

にしし、と笑う神音。ぼくは笑わず、リモコン操作でテレビを消した。

喉を深く、切る。兄貴の荷物に、そんなことが出来るものはなかった。

あったのは、葉っぱの形をしたプレートの付いたチョーカーだけだ。チョーカーの紐が千切れてたとか、プレートから錆びついたような匂いがしたとか、そんなのは気のせいだ。

あんなもので人が殺せるはずがないし。

そんなことができるやつは、限られてる。神音は、違ってから、大丈夫。

「神音、何食うか決めた？」

「羽音を作るやつなら何でもいいや」

へらへら笑う兄貴が、このニュースに関係なんかしてないはずなのに。

……。いや、分かってる。兄貴がしたんだってことはわかってる。

ぼくが認められないのは、プレート一枚で三人もの人間を殺してしまったという事実だ。

別に殺人が悪いとか、そういう道德観の問題じゃない。念のため言っておくけど、ぼくは殺人を肯定してるわけじゃない。

問題なのは、ただかチョーカーの飾り程度のものが、人殺しの道具になってしまったということだ。いや、人殺しの道具にしてしまったということだ。

それは、ぼくと神音の、永遠の別れを意味する。

この国には唯一、殺人の免罪符を与えられた人たちがいる。

その人たちは、人を殺すことが生きることだ。息をすることが、そのままイコールで人を殺すことにつながる人たちだ。

殺人鬼の集団。

彼らは、鉛筆一本で人を殺せてしまう。どんなものでも、手にしただけで人を殺す道具に変えてしまう。それは、その存在になった瞬間に身につく、あるいは潜在的に眠っていた思考が目覚め、どうやればそれで殺せるのかを脳が指示するのだという。

兄貴は、それにとってもよく似ていた。

殺人鬼の一人と認められると、家族とは住めない。

この国で誰よりも豪勢で豪華な暮らしを、完璧なセキュリティを施された監獄でできるだけ。

外に出るには、監視者が何十人も付く。そもそも、滅多なことでは外出できない。

ただそこから出ることもかなわず、同じ殺人鬼となってしまった同胞たちとともに、閉ざされた世界で生きることになるのだ。

そんなのは、嫌だ。

兄貴と、神音と離れてしまうなんて、嫌だ。

『家族になれそうな気がする』といって、人さまの財布を盗んで生きてきたぼくを家に上げたお人よし。

何も考えず定職にもついていないのに、ちゃんと暮らせるだけの安定した収入がある。

何のかかわりもないはずのぼくを、妹だと言って可愛がる…そんな
神音と、離れてしまうのが嫌だ。
いつの間にか心地よくなった居場所。この人のそばが、ぼくのいる
場所だったのに。

何事にも諦めが肝心なのだと、ぼくは学んだ。

運命は何の前触れもなく訪れるのだと、分かった。

けれど諦めるなんて、出来ない。

一緒に、いるために。

「羽音ー？」

「うん？なにー」

「早く、なー？」

「もう少しだから。待て」

「命令かつ！？」

「うん」

「うはー、仕方ないなあ」

笑いあう、この時間を奪うなんてさせない。

諦めるなんて、絶対しない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6249g/>

諦めるなんて、できない

2011年10月5日19時41分発行